

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：37118

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530980

研究課題名(和文) < 感覚 > 作用、特に < 音 > に注目した環境教育と文学教育の横断的研究とその実践

研究課題名(英文) A Study of Literary Sound as Liaison

研究代表者

大國 眞希 (OKUNI, Maki)

福岡女学院大学・人文学部・教授

研究者番号：00418980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：ネイチャーゲームや環境評価ツールとして使用されていたサウンドマップを教育方法に適した形で改変した。サウンドマップを作成する活動により、現実と感性とを結び、人と自然のつながりを重要視する価値形成をしようとの知見を得て、それに基づき、文学サウンドマップを新たな教育方法として提示した。それらの実践報告を行い、有効性を明らかとした。

また、文学における<音>の機構についても、震災前後の雑誌の<音>調査などから新たな理論を組み立て、提示した。サウンドマップ(海中サウンドマップ)と文学サウンドマップを併用することで、主観・客観の二項対立をこえて内面でありながら外部とつながる方法の確立を期待できる。

研究成果の概要(英文)：This study presents as a new teaching method the 'literature sound map', which was inspired by the 'sound map' that was originally used for nature games or as an environmental evaluation tool. We modified the sound map to suit the educational methods, put it into practice, and revealed its efficacy. We found that creating a sound map can form the values that emphasize a connection between people and nature.

This study also presents a new theory of the mechanism of sound in literature, investigating some magazines before and after the 1923 earthquake. Using both the sound map and the literature sound map shall show, beyond the subjective-objective dichotomy, how to connect the inner surface with the outside.

研究分野：教育学 文学

キーワード：音 文学教育 環境教育 感覚 関東大震災

1. 研究開始当初の背景

文学を作者と読者の媒介と定位し、その間に生じる作用を Effet de vie(生がもたらす作用)と言ったのは、マルク・マチュー・ミュンシュである。本研究は環境の変化に強いられるヒトの感覚を、文学テキストと読書の分析、フィールド調査から明らかにする。

小島は、学習者とともに野外に出て、聞こえてくる音を自由に記載できる「サウンドマップ」を作成させる授業を、環境学習の一環として行ってきた。その結果、サウンドマップの制作者は、無意識的に音源が何かを常に想像し、目に見えない背景を探って補完する作業を行なっているとの知見を得た。これは、作成者個人の持つ「音の記憶」と「現実の音」との間を行き来しながら、対象となる場所や風土の歴史に触れていることに他ならない。このような営為は読書行為にも近似しており、本研究を進めることにより、音を媒介に環境教育と文学教育とを交差させ、教室のなかで古典を暗唱するだけではない、野外での、新たな視点による文学教育の方法のひとつを提示することが可能となるだろう。

2. 研究の目的

「<感覚>作用、特に<音>に注目した環境教育と文学教育の横断的研究とその実践」と題した本研究では、文学作品を読む際に文学言説が引き起す<感覚>作用の機構を明らかにし、従来の研究では為し得なかった読者側の<感覚>をクローズアップすることで、「読むこと」の内実を明らかにする。また震災前後の小説を分析して、災害などの環境が激変する体験がもたらす文学的言説の変化とそれに感応する<感覚>の変容の様を考察する。同時に、音を視覚化する「サウンドマップ」を用いた野外調査を行ない、両者を比較することで音をヒトが感受する方法と読書行為との類似点を探る。そのうえで、環境教育と文学教育とを横断する、新たな教育の活動方法を示すことを目的とする。

3. 研究の方法

具体的には、震災前後の資料を網羅的に集め、作品分析の立場から、同時代的な感覚

と震災による影響をはかる。読書によってもたらされる感覚作用の機構を明らかにし、文学における音の正体を探る。ある環境での音を感受する方法と自然環境の変化による影響を実地調査する、の三つの研究軸から成り立っている。については、雑誌「新潮」「新小説」「中央公論」「女性」を対象に関東大震災前後一年間に掲載された小説に表れる音を全て拾いだし、その特徴や変容について考察した。又、調査によって浮かび上がった事象について、日本文学協会においてラウンドテーブルを開催した(2014)。安藤が震災小説に見られる多義的フレームや音の受容のための環境インフラなどを提示、テキストに響く音の在り様などの問題を指摘した。具体的な分析の導入として有島生馬の絵画(大震記録)(1931)を取り上げ、視覚優位の絵画を音風景として観る試みを行い、音に注目するテキストを取りあげ、震災小説の生成を可聴性という視点から分析するなど、いくつかの発表及び議論をおこなった。その議論を踏まえて、雑誌に論文をまとめて上梓した(2015)。さらに調査の範囲を広げ、分析を継続している。については、<感覚>という従来にない機軸での読解に客観性、妥当性をもたせることが不可欠であるため、月に一度の物語研究会で個々のテキストを対象に発表をおこない、読解に偏重をもちたらないよう、また安易な一般化に回収されないよう注意を払いながら作業を行った。で用いるサウンドマップ作成とその方法論の検討については、2012年8月には鎌倉で、2013年9月に日光で実践研究を重ねており、2014年夏季に地元学生の協力のもと、沖縄「やんばるの森」において実施した。また、2014年以降、東京および近郊での文学フィールドワークを継続的に行い、文学と都市、環境と音を実践的に交差させる実験を試みている。2015年8月に、国際芥川龍之介学会隅田川フィールドワークにおいて、大國主導のもとサウンドマップ作成を行い、その成果をまとめている(2016)。また、安氏洋子氏の「絵本の中の音楽を表現する感性教

育とその実践」や阿部正和氏の「高等学校「国語」教科書採録の漢詩の音について」などの発表を含む教育に関する研究会も開催した。そして、それらの結果を基に、音を媒介に環境教育と文学教育と交差させる成果を冊子にまとめ、実践的教育活動を行なう。全研究成果を書籍化する。文学研究、教育学、環境学研究的各立場から成果を査証し、資料分析・実地研究の双方に裏打ちされた教育実践方法を提示する、といった手順で研究を進めた。

4. 研究成果

(1) 震災前後の小説の網羅的な調査・分析

災害などの環境が激変する体験がもたらす文学的言説の変化とそれに感応する<感覚>の変容の様を考察し、以下の成果を得た。

網羅的な小説の調査から、(イ)小説内の音のインフラ整備の様態、(ロ)知覚の変容を考えるにあたり重要な作品の抽出、(ハ)音の扱い方の巧みな作家の抽出、(ニ)この時期の音風景の再現可能性を明らかにした(大國・安藤ほか 2015)。文学史においては、震災後のムーブメントとして新感覚派がクローズアップされてきたが、網羅的な調査から震災後の感覚変容は、新旧にとらわれず様々なジャンルの小説に内包されていることを指摘できた点、本研究の独創性がある。

小説の読みから、(イ)音に注意することで生じた解釈の変化、(ロ)音からのテキスト再現力の実践、(ハ)震災後の感覚の変容を具体的に分析し得た。例えば、芥川「ピアノ」には、ディープエコロジー的な自然と人間の新しい関係が先取りされていること、佐藤春夫「魔鳥」には、想像力の臨界というテキスト内環境の設定がなされていること、当時胎動しだしたラジオドラマ脚本は、空中を伝わる音というモダンの事象をも導く媒体となっていたこと、震災後の怪談に頻出する、海からの声というトラウマの描写法など、社会文化論等に根拠を頼らずに、文学テキストからのアプローチを可能にした(大國・安藤ほか 2015)。個々のテキストによる詳細な分析及び読

解の機構の提示については、乾英治郎、野本聡と共に関東大震災前後の小説(雑誌「新潮」「新小説」「中央公論」「女性」)の網羅的調査を行い、その結果を「関東大震災前後の小説における<音>と知覚」にまとめている(2015)。調査を通し、同時代的な感覚と震災による影響をはかる研究は、今までにない試みであった。

(2) 小説の音の正体

文学テキストを読む・理解するにあたり、音に注目することで読者側の<感覚>をクローズアップすることが明らかになった。

例えば、芥川「神神の微笑」は、海外文化の受容を扱う日本文化論として読まれることが多いテキストである。しかし、小説内の音に注目すると、静かな環境の中に鳴り響く不協和音があり、弱音の中に特徴的な三つの強音を配する音風景が確かに認められる。これらを聞き留めるか、聞き逃すかという主体の聴覚の在り処が、テキストを前にした解釈領域・認識的布置を決定していくことが明らかになった。また、従来の読みが見落としてきた新たな課題を音により導き出せる。「神神の微笑」においては、不協和音という形で提示されるゆえに、違和感から心理的葛藤や課題の欠性への気づきが喚起され、従来の無批判な読みへの批判を導き得た(安藤 2014)。また、太宰治は「音に就いて」の中で「聖書」は「全くのサイレント」と述べている。この「サイレント」とは様々な<音>を含有する無音を指す。「I can speak」では酔漢の言葉を基音とし、もっとも高い倍音として「はじめに言葉ありき」が響いている。さらに言うならば、その言葉は月光の光の波長へと転換し、世界に遍く降り注いでいる。このように小説空間を生成する磁場としての<音>を聴くことができる。あるいは「斜陽」では「十字架」や「蛇」など聖書的なモチーフによってそれぞれ倍音を響かせながら遡及的に反転し、「聖母子像」を浮かび上がらせている。<音>に注目しつつ、いかにして太宰作品が調律されているのか、その重層性、音響を詳細な作品分析を通じて小説の機構から明らかにした(大國 2015)。

文学における音の正体が、主体の感覚を揺さぶる契機であり、見落とされがちな課題への気づきや読みの深度を促進する媒体となることが明らかになった。

(3) 音を媒介にした環境教育と文学教育との交差

環境サウンドマップと文学サウンドマップとを融合させることで、文学という虚構においても、主体の感覚は同様に行われることが明らかになった。従来、小説の読みの過程が可視化され、客観的評価対象になることは極めて少なかったが、音をヒトが感受する方法と読書行為との類似点を探るサウンドマップは、その主体的関わりの可視化を実現させた。

隅田川でのフィールドワークと同時に隅田川を扱った文学テキストのサウンドマップ作成など、文学と環境(都市)を併せて感覚することの実践は、環境学にとっても新たな価値を見出す。都市のアイデンティティの確定に、聴く主体が積極的に関わることを指摘できたと同時に、今後、都市文化へのアプローチとしての街歩きや、地理的文化遺産への寄与は大きい。

(4) 感性学の構築

対象であるテキストとしての文学・都市を、ヒトの外部環境と捉え、主体の感覚の変容を考察したことで、感性学の領域を新たに展開した。ヒトの能動的知覚システムが高度に発達し、様々な情報に共鳴できるようになったことが理解されながらも、科学は「世界と私たちがどのようにつながっているかについての根拠となる知覚理論を提供してきたとは言えない」(J.J.ギブソン『生態学的知覚システム 感性をとらえなおす』2011)。「外的刺激の束から、主観的な感じの変化を登録しながら抽出する」ことは可能であり、「日常の環境で利用可能」でもある。本研究では、この主体に生じる感覚の機構を、文学を読む行為、都市環境を看取する行為から抽出した。また、「世界と私たちのつながり」という内部主体と外部環境の関係が、文学受容と都市環境受容と相同の関係にあるとの知見を得た。ヒトの感性の源とも

なる感覚は主観的とみなされ、科学的な研究対象にしがたい性質をもつ。しかし、〈音〉を媒介とすることで、大國は本研究においてそれを可能にした。主体客体、内部外部という「両者の立場は相互に乗り入れが可能」(三浦佳世 2012)というその稀な場 = 感性を対象とするのが本研究であった。心の働きというヒトの内部感覚であると同時に、対象の個性・在り方という外部属性である点に有効性があり、本研究はそれを明らかにした。

(5) 新しい教育方法の提示

ネイチャーゲームや環境評価ツールとして使用されていたサウンドマップを教育方法に適した形で改変した。これまで利用されてきたサウンドマップの解釈や目的とは異なり、サウンドマップ作成を音風景の文章化する作業で挟み込むかたちをとることで、作成者の音風景の構築をより明確化することを可能とした。それに着想を得て大國が文学サウンドマップを新たな教育方法として発案・実践し、それらの有効性を明らかにした。文学作品を読む際に文学言説が引き起す〈感覚〉作用の機構に基づく、新たな教育の活動方法である。これについても継続的に実践及び報告などによって、その有効性を論じている。

またサウンドマップを作成する活動により、現実と感性とを結び、人と自然のつながりを重要視する価値形成をし得るとの知見を得た。サウンドマップを海中で実施する「海中サウンドマップ」は、サウンドスケープ研究における初の試みであり、独創的かつユニークな実践研究である。マリンドIVINGのアクティビティのひとつとして実用化できるよう、評価と改善を繰り返し、その技法の確立に向けて、検討を重ねている。海中では主体者の経験や記憶にはない音が多く聞かれるということから、小説空間で音を聞く文学サウンドマップと共通点が多く、文学サウンドマップの限界を補える可能性が高い。サウンドマップ(海中サウンドマップ)と文学サウンドマップを併用することで、主観・客観の二項対立をこえて、

内面でありながら外部とつながる方法を構築できるのではないかと考え、研究を継続している。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文) (計 21 件)

大國眞希、文学空間に<聞こえない音>を聞く授業の理論と実践、福岡女学院大学紀要(人文学部編)、査読無、2016、第 26 号、pp. 27-50

<http://hdl.handle.net/11470/134>

大國眞希、「黄金風景」の黄金性、キリスト教文学研究、査読有、2016、第 33 号、pp. 98-109

大國眞希、隅田川におけるサウンドマップの考察、芥川龍之介研究、査読無、2016、第 10 号、pp.212-224

大國眞希、太宰治に見られる音色の種類、太宰治スタディーズ、査読無、2016、第 6 号、129-134

大國眞希、野本聡、乾英治郎、安藤公美、関東大震災前後の小説における<音>と知覚 雑誌『新潮』『新小説』『中央公論』『女性』の調査から、福岡女学院大学紀要(人文学部編)、査読無、第 25 号、2015、pp. 107-136

<http://hdl.handle.net/11470/87>

小島望、サウンドマップが示す芸術と科学の関係性、水月、査読無、第 1 号、2015、pp.3-9.

大國眞希、<文学サウンドマップ>をつかった教育方法の可能性、水月、査読無、第 1 号、2015、pp.11-37

安藤公美、佐藤春夫「魔鳥」におけるイメージの臨界、水月、査読無、第 1 号、2015、pp.53-62

大國眞希、<音>と<空間>を読む「国語」教材の理論と実践、水月、査読無、第 1 号、2015、pp.99-105

大國眞希・安藤公美・小島望・遠藤祐、架橋としての桃源境思想：関東大震災から現代、福岡女学院大学紀要(人文学部編)、査読無、第 24 号、2014、pp.1-27

151-160

<http://hdl.handle.net/11470/61>

大國眞希、耳から内在化される七不思議 本所深川ふしぎ草紙、宮部みゆき、査読無、第 16

号、2013、pp.28-33

大國眞希、感性と文化、別冊太宰治スタディーズ、査読無、第 1 号、2013、pp.40-49

大國眞希、自己反省としての風景と音、近代文学合同研究論集、査読無、第 10 号、2013、pp. 112-119

大國眞希、小説に倍音はいかに響くのか、言葉はいかに生成するか、太宰治スタディーズ、査読無、第 4 号、2012、pp.58-68

大國眞希、安藤公美、<音>に注目した文学教育と環境教育の横断的研究序論、川口短大紀要、査読有、第 26 号、2012、pp. 17-33

(学会発表) (計 17 件)

小島望・大國眞希、サウンドマップを利用した文学教育と環境教育の架橋、日本サウンドスケープ協会、2016 年 5 月、青山学院アスタジオ、東京

大國眞希、野本聡、乾英治郎、安藤公美、<音>に注目した読みの可能性 関東大震災を機軸に、日本文芸協会、2014 年 11 月、学習院大学、東京

小島望・大國眞希、フィールドサウンドマップと文学サウンドマップの比較とその特性、日本環境教育学会、2014 年 8 月、法政大学、東京

小島望、サウンドマップを用いた環境教育と文学教育の横断的研究：音が描きだす風景とは、日本環境教育学会、2013 年 7 月、びわこ成蹊スポーツ大学、大津市。

(図書) (計 1 件)

大國眞希『太宰治 調律された文学』、翰林書房、2015、221 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大國眞希 (OKUNI, maki) 福岡女学院大学 人文学部 教授、研究者番号: 00418980

(2) 研究分担者

小島望 (KOJIMA, nozomu) 川口短期大学 ビジネス実務学科准教授、研究者番号: 10435240

(3) 研究協力者

安藤公美 (ANDO, masami) 青山学院女子短期大学他非常勤講師、研究者番号: 10626948